

第五幕 阿鳥江嬢の書齋

梨園第一の花と聞ゆる阿鳥江が居間とのみにて其裝飾の單純なる、恠る名優が住處とも思はれず、團の外にて三會根と婢との打語らふ聲洩聞ゆ。

三「もはや十一時にもなれば、御寢とは想うて居れど偶然してお目覺であらうも知れぬ程に、些と私が來たと傳へて下され。」

と言ふ處に阿鳥江は立出て、

阿「丁度此方様をお待申して居ましたわいな。」

三會根は婢に向ひ、

三「それ何じや、待つてお在なされたといふのう。」

阿「本に今宵のやうな苦い念をした事はござんせぬ。」

三「私も其事が苦になつて、譯を聞かぬ内は何も宅へは歸られませぬゆゑ、それでお訪ね申したのでござります。」

阿「よう來て下さんした。此方様が見えたばかりに幾何か胸が晴れましたわいな。」

三「私も貴方の顔を見て安堵しましたわいの。先程貴方を戸口までお送り申すと、直に劇場へ駈着け、今些と戻つて來たのでござります。」

阿「もう劇は終ねたのでござんすか。」

三「否々、まだ一時間も間がござります。」

阿「それは好い都合で御座んした。私は氣分が勝れませぬ故、明日は舞臺へ出ませぬ程に、此方様から好いやうに言うて下さんせ。」

三「はて可うござります、私が吞込んで其の様に取計ひませう。御返辭は又後程。」

阿「毎もく私故に御苦勞懸け、思へば濟まぬ事でござんすわいな。」

三「何の私に改つた其の言。氣分が悪いとあつては私も氣遣てなりませぬ。が、それより心配なは公爵の奥方様と貴方との事、お上には其處等に氣も着かれまいが、貴婦人方は誰方も皆様子を曉つた塩梅。」

阿「はて、解らうが差支はござんせぬ。いつその事に奥方を取殺さうとまで窺めた私。那で少は氣が晴々しましたわいな。」

那の始末の一句を讀んだ時は、刃を以て奥方の吭を刺通したやうな、もう好い心持がしましたわいな。而して私が睨んだ其の時に、奥方の顔の眞蒼になつたを御覽なさんしたか。」

三「私は氣が氣ではござりませなんだわいのう。そりや實に近頃が無い出來ぢやござりましたが、萬一事になりは爲まいかと、見てゐる空は無いくらゐ、那の方々は美々しく綺羅を着飾つて、表面は飽迄品善う、内心如夜又の意地くね悪く、いやもう可恐く執念の深いもの。那の身分と威勢とで、何なりと恚う爲うと思立てば、随分川の水をも逆に流しまする。」

偶然貴方に意趣返を爲うなどと、何の様な事を巧まうも知れぬゆゑ、私は其が氣遣でなりませぬ。」

阿「仇を返さば返せ、私は那て氣が晴れました。とは謂ふもの、森葉様、御一緒にと言うた時、往かれぬと有仰つたは、定めて那方に約束有つての事ならん。思へば、私は口惜しうござんすわいな。」

と言ひつゝ起上らんとすれば、

三「あ、これ、何處へ行かうとなされまするのじや。」

阿「あた醜猥い二人の間へ躍り込み、思ふ存分怨を晴らし其場を去らず死ぬる覺悟！」

三「そりや、まあ、何を言ひなされまする。」

阿「私は悔しうて、悔しうて、生きて居る空は御座りませぬわいな。」

三「ま、氣を鎮めて、下にお在なされませ。二つとは無い大事の命、死なうなどは、もし一圖の迷、覺ひれば夢も同じ事、此の私でさへ慙う見えて戀には寢す愛さ身なれば、逆も生効のない體と幾度思うたか知れませねど、死んで思の霽れるのではなし、生きてさへ居るならば、又好い智恵も出るものと、今だに存へ居りますわいの。」

阿鳥江は力なげなる身を椅子に据ゑ、

阿「あの、此方様も戀ゆゑに?!」

三「然う吃驚なされては面目もござりませぬが、老翁になつて

も情には變りは無いものなれば、猶且惚れもしまする、怨みもしまする。」

阿「そんなら、あの、私のやうな切ない念も？」

三「致しましたわいのう。今では丁度五年前、不圖思詰めた一心は、慥はぬ事と知りながら、何にも慥にも諦められず、それはもう、謂ふに謂はれぬ切ない苦しい目を見ましたが、今では其も慣れて了うて、大抵の事は何ともござりませぬわいの。」

阿「其の氣丈が可羨しうござんす。どうぞ然した氣に成られるやう、屹度思直して見ませうわいな。」

三「そりや實でござりまするか。」

阿「何の嘘を言うて可いものでござんせう。思へば慥う成るのも約束事、無い昔と諦めて諦められぬ事も御座んすまい。人に怨は有るもの、實は吾身の不運と思つて居ますわいな。」

と差合む涙を拭ひ居たり。婢は遽に戸を開きて、婢「此匣を差上げてくれと、唯今御使でござりました。」

阿「何方からの御使じやぞえ。」

婢「薩克斯伯からと申されました。」

阿「何、森集様から！そこに置いたが可い。」

婢が置去りし匣の前に寄りて、

阿「はて、何を寄越なされたのやら、合點の行かぬ事でござんす。」

三曾根は氣遣顔に扣へ居る。阿鳥江は何氣なく蓋を推啓くるや否や、あと叫びざま其處に打仆れぬ。

三「どう爲されました！これ阿鳥江嬢。」

阿鳥江は忽ち氣色變りて、

阿「ても不思議な！今此蓋を開けしところ、何とも謂はれぬ氣持になり、總身に水を沿びたやうにごさんした。」

三「して、其中には何が入れてござりまする。」

阿「これは私が戀の證と真心こめて、森巢様へ差上げた花束でござんすが、固より手に取る間も無く蓋を啓けると今の爲體……が、聞えぬは森巢様、然程迄に此身をお嫌ひなさるゝなら、花は棄てるとも焼くとも、お心任にしたが可さうな

もの、何が憎うて、面當がましう恚してお返しなさるゝとは、餘と云へば然てない爲方。」

三「そんなら、それは伯爵様がお送りなされたのでは御座りませぬぞえ。こりや、あの、お傍に居る意地悪めが唆したに違ござりませぬわいの。」

阿「設ひ一日片時なりとも、思ひ思はれし二人が中、其を今更此の様に生恥搔かすお心には、奈何しても成なされましたぞのう。」

と阿鳥江は可懐げに花を打目成りて、

阿「昨日まで色香妙なる花なりしも、榮を見するは單一時、今日は敢なく衰へて、戀も覺めたる姿じやな。つい此程まで大

事にお持ちなされたものを、難面うち戻しなされる、心の内、花も定めて怨しかる！吾身の誠を籠めたる其方が、恚してむざく返さるゝからは、戀も情も是限り、思へば儂い夢であつたよな。」

と花束取つて頬に推當て、

阿「世の中の無常を知らず此花束、見るもなかく思の種。」

と暖爐の燃頻る中に打込む。三會根は其の穩ならぬ態に驚き、

三「こりや貴方は何爲されました。」

阿「もう何も心配しては下さんすな。私は脱然思切つて了ひましたわいな。」

と暖爐の中を賸めて、

阿「あゝ、本に此胸の清々した事わいな。」

忽ち奥の方より駆込み來れるは、思掛無き森集伯なり。

森「阿鳥江嬢、阿鳥江嬢！」

と言ひつゝ其手を把るを、阿鳥江は振解かんとすれど放たず、

森「さゝ其の立腹と存せし故、此迄詫に参りしぞ。實は先程同道せんとは思ふたなれど、公府夫人の手前もあり、又此身の名譽も棄てられねば、忍んで今迄留りしが、最早此身諸共心まで最愛き此方の物なれば、如何様とも存分に致してくりやれ。」

阿「そりや皆嘘でござんすわいな。」

森「あいや、神の御名を誓に立て、今夜限武揚公の館の閤は斷じて踏まぬ。阿鳥江嬢、九死一生の身が莫大の負債を償ひ、恥辱の鎖鎖を解さくれたる無名の大恩人は誰なるや、其方ならては知る者無し、と思ふが如何に。」

阿「そのやうな事は存じませぬ。」

三「會根は二人の間に割つて入り、

三「其の大恩人こそ此にござる阿鳥江嬢。」

阿「何を言はしやんすので御座んすぞいの。」

三「是が言はずに置かれませうか。身上を打潰して貴下様をお救ひ申したのは此の阿鳥江嬢で御座りまするわいの。」

阿「棄てられた私が何て森様をお救ひ申しませう。見透いた嘘は言はぬもので御座んす。」

三「え、見透いた嘘じやと！其が見透いた嘘じや、自分の身上では足らぬとて、他の物をば借りて迄も、貴下様の御難儀をお救ひなされた其の深切、もし、殿様、私は傍に觀て居て涙が零れました。此の廣い世界にも阿鳥江嬢の外に誰有つて、貴下様の事を身に替へて其の様に思ふ者が御座りませう。詐多き世の中に頼しいのは戀の誠、貴下様は古今の大果報者で御座りまするわいの。」

阿「此方様はまあ何を泣いて居やしやんす。」

三「此間からの貴方の心が漸く殿様に達いたと思へば、嬉しう

てく、嬉涙が出ますわいの。憊して安心致しました上からは、又些と劇場まで参つて、後程も目に掛かりませう。然やうなれば御免なされて下さりませ。」

と三會根は得々出行きぬ。

森「そんなら、此身の自由と成りしは、案に違はず其方の情。」

阿鳥江は三會根の行きける方を指し、

阿「否々、貴下はちろか、私をも助けてくれたは那の人でござりまする。」

森「阿鳥江嬢、何も申さぬ、忝なうござる。さて改めて申入るゝは、旋て此身空く戦場の露と消ゆるか、但軍に勝つて王冠を戴くか、豫めトひ難き運命なれど、若武運愛たく、萬乗の

王位に登らば、半座は其方へ身が寸志、必ず受けてくりやるであらうな。」

阿「すりや、此阿鳥江を御后に!!」

森「いかにも。世にも得難き精神、容貌、双美の後、身が國君となりて億兆の上に立ち、喜憂を俱に與にせんもの、其方を措いて誰有らん。大恩人の皇后陛下。」

と阿鳥江の顔を打成りしが、

森「こりや、何と致せしぞ。俄に變りし其顔色!」

阿「何にもお氣遣なれさて下さりませるな。曩には悔しいやら、悲しいやら、切ないやら、今又此の様に嬉いやらて、急に異な心持が致しまするわいな。」

と言ひつゝ次第に弱り行く氣色。
森巢は驚き介抱し、

森「こりや眩暈が致すと見ゆるな。」

阿「奈何した譯か知りませぬが、あれ〜、氣が段々と遠くなりまするわいな。曩に那の花束を頬に當し〜から、我身が我身でないやうな、謂ふに謂はれぬ異な心地。」

森「其の花束とは？」

阿「さあ、其の花束を永き別の證と思ひ居りましたに、嬉しや、時をも移さず貴方の御越。」

森「何と言やる。」

阿「那の箱に入れて、貴方よりお戻しなされた花束。」

森巢は訝しと起ちて卓子の側に行き、

森「はて怪しからぬ。身は花束を送返せし覺無し。して其花は何處に在る。」

阿「花束の返る上は、吾身の捨てられしも同じ事、生恥曝せし形見の品、其火の中へ入れて了ひましたわいな。」

森巢は阿鳥江の手を取りて、更に驚き、

森「烈火のやうなる此の手の熱氣は?! こりや何と致せしぞ。」

阿「あゝ、此の頭腦の中が搔廻さるゝやうな。あれ〜、部屋がくる〜廻るやうて、四下の物まで動出します。私は今何處に居るのでござんすやら、もう〜消え行くやうな心持。ああ、此頭が何處ぞへ飛んで行きは爲ませぬか。こりやまあ、

何爲たら可うござりませうなあ。」
 言了りて暫く伏沈むよと見れば、忽ち形相凄しく、聲を
 暴げ、身を振りて、

阿「いえ、奈何有仰つても私は肯入れませぬぞえ。那の
 方が無いほどなら、何も此世に望はござんせぬ。何の様に有
 仰つても、是許は然はなりませぬ。森巢様あつてこそ憚して
 居られる私の體、もう其様な事聞かせては下さんすな。あ、
 もう幕が開いたさうな。此の、まあ、座敷の人わいな。私の
 登場を待かねて居るのであらう、あ、忙しい、今直に出るわ
 いな。……森巢様にも目に懸かつた其日から、何が何やら分
 別も無いやうになつた私が心、命までも入揚げて盡す誠が通

ぜぬのか、是程眞實思うて居るに、見易へられたが口惜い！
 本に、まあ、近年稀なる此の大入、座が壊れて了ひさうぢや
 わいな。」

森「これや、如何致せしぞ。氣を確に持つてくりやれ。」
 阿「黙つてお在なされませいな、今舞臺へ出るところではござ
 りませぬか。ても夥しい見物衆、而も揃ひも揃うて見事な服
 装、而して私にばかり目を着けて居なさんす事わいのや、
 那處にお出なさるゝは、ありや森巢様じや、あ、然じや、
 森巢様じや。此方を見ては笑うてお出なさるゝわいな。」
 と餘は舌の纏れたらんやうに口の内にて呟きたりしが、猶
 舞臺に在る意にて、連に臺詞を口走りなとす。

森「こりや阿鳥江嬢、これは爲たり、最早や誰とも辨へぬと見ゆるわい。如何致して可からうぞ。」

と慌忙しく机上の鐸を打鳴せば、聽て婢は入來りぬ。

森「見やる通の始末なれば、直様醫者を呼んで來てくりやれ。」

婢「畏りました。」

と出行く。森巢は彼の手を握りて、

森「こりや阿鳥江、身が申す事は解るてあらうな。如何じやな。」

と言へど、阿鳥江は既に曹騰として、聲さへ次第に衰へつ

阿「あゝ、誰やら那處に坐つたのは、駝とは見えねど那の女

其の又女と話を爲て居るは森巢様ぢやないか。あゝ、森巢様
じや、森巢様じや！」

森「其の森巢は此に居るぞや。」

と言へば耳にはいらす、彌よ弱る聲細く、

阿「えゝ、もう二人で顔見合せてばかり、あれゝ、那の様に
手を握合うて……私に此に丁と視て居りますわいな。」

森「阿鳥江、そりや其方は何と言ふのじや、心を落着けてくり
やい、のう。」

阿鳥江は又言銳に、

阿「何でござんすと？」

森「あゝ、今の言が耳に入りしか。」

阿「何と有仰ります。」

森「躬は森巢じや。氣を確に持つて、篤と顔を見てくりやれ。

これ、森巢であるぞ。」

阿鳥江は熟々其顔を打成り、

阿「あの森巢?! いえ、其森巢様なら那の女の側に居ります故、私の事などは想出してもくれませぬ。而して貴方は誰じや、誰じや、何者じや。」

と物凄じき面色にて屹と男の顔を眺めたり。森巢は覺えず慄然として身を退きしが、阿鳥江は忽ち又臺詞を口走り居たり。弗と其聲の息むよと見れば、更に目を睜きて森巢の顔を覗め居て、

阿「や、貴方は森巢様!」

と其腕に縛と絶る。

森「誰ぞ居らぬか。早く此へ。」

と呼ぶ聲に、恰も入來しは三曾根なり。

三「阿鳥江嬢には急病にて、容体危しと承りましたが、そりや實でござりまするか。」

森「否もう驚入つたる俄の苦悶。」

三曾根は急ぎ椅子を持來りて勸むるに、森巢は阿鳥江を搔抱きて其に倚らしめたり。三曾根は呼吸を候ひて、

三「まだ息は確でござりますれば、力を落すには及びませぬ。」

阿鳥江は目を睜き、

阿「此の様な苦しい事はござんせぬ。側にお在なされるは誰方
でござります。」

と四邊を胸せしが、熟と森巢の面を見入りて、嫣然と打笑
み、

阿「あゝ、嬉しや、貴方は森巢様?!
と三會根を見ては、

阿「此方様も此にてござんしたか。曩から此に居て下さんした
か。もう頭腦は快うござんすが、今度は胸が焚ゆるやうな。
渾身は全て火でござんすわいな。」

三「うむ、こりや的然毒藥を嗅せられたに違ござりませぬ。
毒藥を嗅されしとは、そりや誰に！」

三「申す迄もござりませぬ、阿鳥江嬢をば戀の敵と附規ふ武揚
公衛夫人こそ……。」

森「これ、滅多な事を。」

阿「あら苦しや……私不便と思召さば、萬望此の苦艱をお
助けなされて下さりませ。早う死たいと言ッたのは、森巢様
に棄てられて生効の無い身と思ひし故。妻に持つ、后に立て
ると世にも嬉し御言を聞くからは、何て死なれう、死にとも
ない。私は死ぬのは可厭じやわいな。」

三「そんなら殿様の奥方に？」

阿「成られる大事の此身ぢやほどに、萬望、神様、お慈悲に命
をお助けなされて下さりませ。切めて一日二日なりと思ふ御

方のお傍に居たらうござりまする。私は此の御方のお蔭にて、輝く未来の知れてあれば、此では奈何も死なれぬ体。」

森「目も當てられぬ苦痛の有様、何爲ん術もあらざるか！」

阿「あゝあ、萬望命ばかりは……憊う苦うては、存命の程覺束なし。(森巢に向ひて) 萬望側をば離れて下さりまするな。悲や、これが此世の御別、私は念が残りまするわいな。」

森「吾が最愛なる阿鳥江よ、設ひ其方が梨園の大名亡する秋ありとも、一旦替うた吾心の誠は終に渝らぬぞよ。」

阿鳥江は苦しき息の下より、
阿「え、忝なうござりまする。憶出せば幼きより舞臺の花と唱はれて、今を盛の色香さへ、此身と共に消行けば、残る名

のみの墓誌、詣づる者は……。」

森「夫の森巢。」

三「幼馴染の此の三會根。」

阿「も二人様、然らばてござんす。」

と敢無く落入る。三會根は撞と打倒れて、

三「可哀や、事切れましたかいの。」

森「無残な事を致したわい。身幸にして響の冠を得るならば、其樂を分たんものと思ひしに、死ぬる其方の怨より、此身の恨は幾許ぞ！設ひ其人空くとも、薩克斯伯爵森巢の名、さ

てはクウルランドの王冠は、阿鳥江の名と永く添ふてあらうぞ！」

第三大悲劇
第一卷 怨 (畢)

明治三十九年七月十五日印刷
明治三十九年七月十八日發行

定價金六十五錢

不許複製

怨

譯者

長田秋濤

發行者

平山勝熊

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區尾張町一丁目一番地
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京株式會社秀英舍印行

發兌元

東京市京橋區
尾張町一丁目

合資
會社隆

文

電話新橋二五八六番

告 豫 刊 近

三大悲劇 第一卷 祖

國

全一冊

八月發行

愛國の志士慨然として起ち、苦心慘憺たる回天の事業も事遂に志と違ひ、祖國の爲めに恨を呑みて斷頭臺上の露と消ゆる歴史の悲惨なる事件を骨子としたる雄大の傑作なり。篇中に活動せる人物には、悪虐無道の敵將あり、義に勇む慷慨の志士あり、戀の爲めに國を賣り夫を賣る無比の大姦婦あり、將た花の如く天使の如き乙女あり、豪壯の裡に戀愛、悲惨の衷に光明あり、悪虐の敵將に配するに愛の權化たる其の妻を以てし、愛國の志士に配するに意志の薄弱なる一姦婦を以てす、波瀾多く變化極まりなき西歐文壇の誇とせる一大名作たるを窺ふに足る。

三大悲劇 第三卷

七

首

全一冊

九月下旬發行

著者長田秋濤氏「怨」、「祖國」と共に本篇を翻案されしは、蓋我が劇界、かの四疊半的の戀愛物にあらざれば、所謂家庭物なる陳腐平凡極まれる脚本にのみ充たされて、結構雄大なる名作に乏しきを愛へ、一服の興奮劑として世に泰西の大傑作を勧めらるゝ所以也

東京 隆文館 發行

上田 敏君序
落合浪雄君譯

七日物語

新式洋裝
定價金四十八錢
郵税金六錢

西歐の名華『七日物語』は今や浪雄君の才筆によりて、我花園に移し植ゑられぬ。げに『七日物語』や名華の粹、浪雄君や文壇の雄、兩々相俟つて光彩陸離たるものあり、苟も文學の眞髓を知らむと欲する者は座右に一本を備へて滾々たる詩興を味ひ心神の修養をせよ。

齋藤弔花君著
梶田半古君畫

田園生活

瀧酒美木
定價金五十錢
郵税金六錢

弔花君が三年間の田園生活に於ける小品を集めたるものは即ちこれ也、平安と幸福とに満てる田園生活の清興は、いかに君の才筆によりて靈動せしかを見よ、青春胸に憂愁を抱ける若者よ、乙女よ、何ぞ來りて慰籍を是に求めざる。あゝ悲む者愁ふる者戀に乾ける者の唇に湧くが如き同情の涙を澁ぐは我自然詩人の筆なりと知らず、やこれ綠蔭楊邊の好師友。

鳥海嵩香君著 ● 宮川春汀君畫

人の罪

總クローズ美本 全一册
定價金八十五錢 小包料金十錢

新に顯はれたる作家嵩香君は温雅の辭、流麗の筆を以て名を得たるもの也、こは君が傑作にして君が最も心血を傾注したる快著也、今や裝釘の美を凝し、出て、江湖の清鑑を待つ小栗風葉君著 ● 鏑木清方君畫

麗子夫人

クローズ製美本 前篇後篇
定價各六十錢 郵税各八錢

花盛にして風雨の如あり月明にして村雲の歎あり佳人才子戀の爲めに萬斛の血涙に咽ぶ、風の朝、雨の夕、明窓淨机のほとりに縋いて限りなき慰籍と教訓とをこの裡に求められよ柳川春葉君著 ● 鏑木清方君畫

浮沈

總クローズ美本
前篇金六十錢 郵税各八錢
後篇金七十錢

榮枯盛衰常なき浮き世の大海を一葉の小舟は波に揺られて浮きつ沈みつ何所に行かんとはする血あり涙ある兄妹恩義の爲めに苦しまんとす著者一枝の筆棹よく前途の暗潮を照さん

伊藤銀月君二大快著

闇黒日本史

銀月式裝釘
定價金六十錢
郵税金八錢

史眼炬の如き著者は歴史の裏面に潜める秘密の庫を發き鋭利なる觀察を以て奇抜の新案を下すこは君が得意會心の書にして波瀾重疊複雑錯綜せる結構を叙して遺憾なくこれを讀まざしては共に歴史を語るべからずこれを繕かずしては歴史の裏面を知る事能はざる也

日本海賊史

銀月式裝釘
定價金五十錢
郵税金八錢

諸君は既にバイロンに詩化されたるの海賊を見たり、今又銀月氏が如何に海賊を詩化せんとするかを見ざる可からず、上は神代の英雄伊弉諾伊弉册二尊より下は現代無名の二奇傑に至る迄海濤と關聯せる大和民族の歴史を或一面より觀察して、眼光骨髓を穿透す。

伊藤銀月君二大快著

銀月君獨特の深刻なる筆致によりて神の如き女の真相を赤裸裸に露はし躍々として紙上に躍り來るの感あり行文流麗奇抜にして趣味津津なり。

世界女性史

定價金六十錢 郵税金六錢

男子は之に依らずして異性の眞秘を叩くを得ず、女子は之に依らずして自己の真相を知る能はず、正にこれ破天荒の快著、敢て江湖諸士に侷む

四

『海國日本』は、海洋を絶愛する銀月が最得意の題目にして、海國日本を地理と歴史との兩面より觀察し、其關係の上に最新なる着眼點を定め之を基礎として縱横

海國日本

銀月式裝釘定價金六十五錢 郵税金八錢

自在に日本の海に關せる歴史を記述し評論したるもの也、全篇奇警なる觀察、精透なる論述とを以て滿つ、

田山花袋君二大著述
平福穂君畫

旅がた

定價金六十錢

ゆかしき名なる哉『旅がた』これ花袋君が旅寐の夢に留めたるくさぐさの物語を集めしものにして、美しき景、優しき情、兩つながら奇しき調べを奏て、人の愁を慰むるこ

郵税金六錢

そゆかしき限りなれ

草

定價金六十錢

一篋一笠、行雲流水に身を任せ、七寸の草鞋に踏み破りたる背山白水の妙なる面影を描き、これに纏綿たる情を點綴して、海棠雨に會ひて愈しほらしきが如く、一しほ榮えある趣を呈して、人の心を引くぞうれしくなつかしき極みなる

郵税金六錢

枕

五

小島鳥水君二大著述

山水無盡藏

山崇く、水清き、神の偉業は幾世経るとも變らじな、この寶の庫の鍵を開きて山の様、水の姿を美しき水壺のあととして書き付けし、此一巻の書を繙かむ者は、誰か讚美の聲を放たざらん

總クローリス
三色版二葉
寫眞版二葉
定價金七十錢
郵税金八錢

日本山水論

これ著者が得意の書にして修養深き科學觀察に、華麗多趣なる文章を以て多年の經驗と瀟灑とを傾盡せしは即ち本書にして、山水文學の白眉也、苟も山水を論ぜむとする者は來り繙き給へ

總クローリス
三色版一葉
寫眞版一葉
定價金三十錢
郵税金十錢

六

兒玉花外君著

ゆく雲

好評

心なき行く雲も詩人の目よ

り見れば趣多きを、まして

熱誠の詩人花外君の筆を待

つに於てをや。君や温厚の

人、一度感ずるや胸奥の琴

線高く鳴りて優婉醇雅の詩

となる、『ゆく雲』は實にそ

の粹を集めたるものなり

定價金四十五錢
郵税金六錢

横三 潮宅 夜克 雨己 君君 著書

花守

大好評

夜雨君は眞詩人也君が胸中

の情鬱を集めたる眞情の聲

は即『花守』也これ一篇の哀

史にして靈彩渾然として絶

えて一點の汚點なき神品な

り。筑波は濃紫に暮れ残る

黄昏、夜雨君の俯を此篇に

髣髴して誰かその薄倅に同

情の涙を澗がさるものぞ、

七

大 好 評 小 說 書 目

草村北星君著	廣津柳浪君著	德田秋聲君著	波邊霞亭君著	橋本埋木庵君著	黑法師君著	小栗風葉君著	田口掬汀君著	稻岡奴之助君著
相 思 怨	仇 と 仇 (前後)	血 薔 薇	次 郎 島	歌 吉 心 中 (上)	新 細 君	う き 寐 人	情 の 大 王	海 賊 大 王
郵定 稅價 金七十五錢	郵定 稅價 各金七十錢	郵定 稅價 各金八十五錢	郵定 稅價 各金七十錢	郵定 稅價 各金八十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢

大 好 評 小 說 書 目

草村北星君著	菊池幽芳君著	大塚楠緒子君著	德田秋聲君著	加藤眠柳君著	黑法師君著	小栗風葉君著	江見水陸君著	草村北星君著
露 子 夫 人	賣 花 娘	晴 小 袖	病 戀 愛	水 彩 色	花 夜 叉	美 丈 夫 (上下)	海 賊 の 子 (二册)	澄 子
郵定 稅價 金七十五錢	郵定 稅價 金九十五錢	郵定 稅價 金八十五錢	郵定 稅價 金八十五錢	郵定 稅價 金六十五錢	郵定 稅價 金六十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢	郵定 稅價 各金七十五錢	郵定 稅價 各金六十五錢

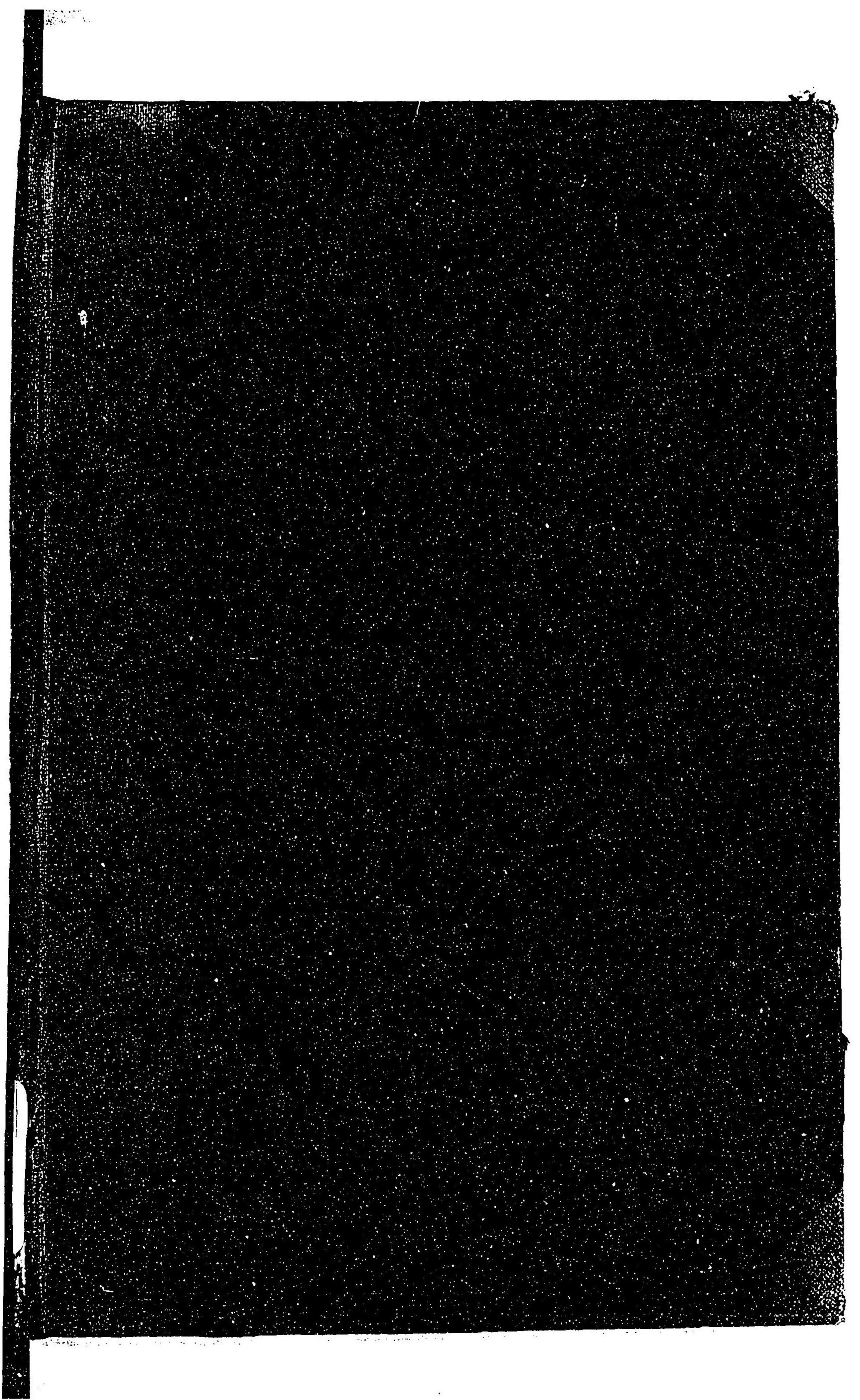
近 刊 豫 告

草村北星君著	稻岡奴之助君著	小林 隼 月君著	鹽目平之助君著	久保天 隨君著	田中花 瀨君著	久保天 隨君編	江見水 滌君著	孫原 滌 柿君著
母の面影	廂 髮	瀧 の 音	フランクリン女性觀	三國志演義	草花栽培全書	明治百家文選	海	大石良雄(上)
郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定	郵定 稅價 未 定

十

32

293



32

293

100843-000-9

32-293

怨

スクリーブ/著

M39

DBY-0089



